

【地域の目指すべき姿(目標)】

**大目標** 入院時に医療・介護関係者が協働し、情報共有を行うことで、本人が希望するところに退院し、支援を受けながら再発や病状の悪化が予防でき、また、終末期においては安心した生活ができる。

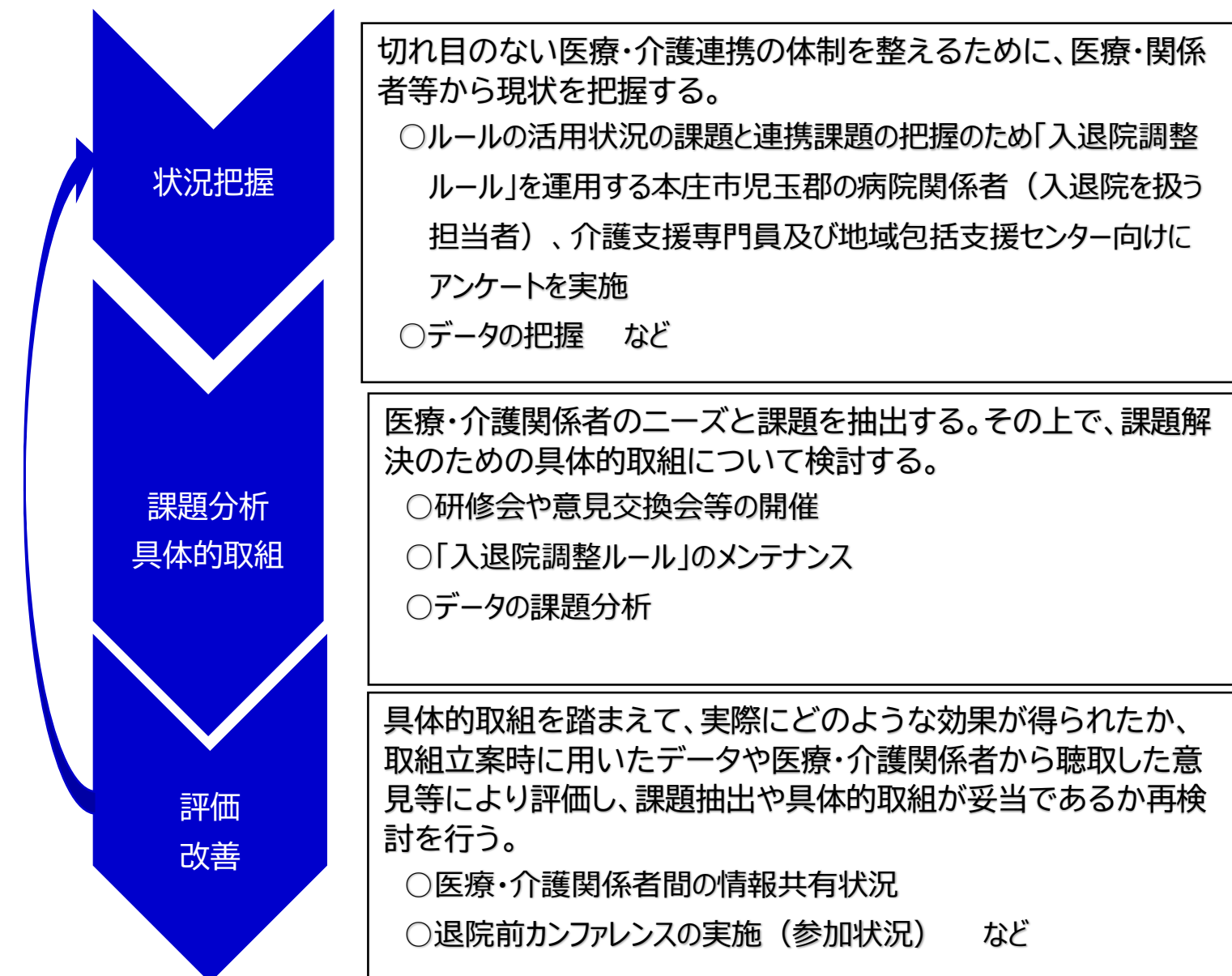
**小目標** (1) 退院時から、本人・家族と医療・介護関係者が、協働・情報共有できる連携体制を構築できる。  
(2) 医療・介護関係者間で、本人・家族の思いや希望を把握した上で、退院後の在宅生活についてイメージできる。  
(3) 医療・介護関係者間で治療方針やケア方針を共有でき、ケアプランに反映し、退院に向けて必要な支援を調整できる。

【まとめ】

・現状把握、課題分析、取組、評価をPDCAサイクルに沿って、地域の实情に合わせて進めてきた。  
・研修会や意見交換会の開催により、医療・介護関係者がそれぞれの視点を理解し、本人の望む生活についてイメージしながら情報共有・協働して支援することの重要性の理解を図った。また、顔の見える関係づくりにより、連携体制の構築が進んだ。  
・今後は、4つの場面を意識した取組の中で入退院支援を継続し、入退院調整ルールの手引きの活用状況やケアプラン点検等の中で病気の再発予防・重度化防止の視点の反映状況等を確認していく。  
また医療・介護関係者が協働し、本人・家族の希望する生活が継続できるよう、必要な連携が図れる体制を目指していく。

【令和3年度～5年度の実施内容】

【実施内容(計画)】



【令和3年度】

◆本庄市児玉郡の入退院調整に係る病院関係者及び介護支援専門員・地域包括支援センターを対象に「入退院調整ルール」の利用状況アンケートを実施  
<アンケート結果より現状と課題>

- ・介護支援専門員は退院時カンファレンスで得た情報を活用し、疾病の再発・重度化予防のための効果的な支援へつなげているか
- ・介護支援専門員は退院時カンファレンス等で生活上の留意点を医療側へ聞くことにハードルを感じている
- ・医療職は介護支援専門員が抱えるハードルについて認識しているものの、実態が分からない

↓ ↓ ↓

◆「在宅を支える医療・介護者研修会」の開催

講師:埼玉県立大学大学院兼研修開発センター 川越 雅弘 教授 対象:入退院時支援に携わる医療・介護関係者  
※令和3年11月2日(火)・24日(水) 講義「ケアマネジメントに求められているもの」  
グループワーク「脳梗塞事例・誤嚥性肺炎の事例よりアセスメントや対応策の捉え方を学ぶ」

<研修会アンケート結果より>

医療の視点について、介護支援専門員の気づきや、医療職との連携に活用できるシートがあるとよい。

↓ ↓ ↓

◆退院時支援等に活用するためのアセスメントシートの検討

※令和4年2月3日(木) アセスメントシート作成打合せ会開催

【令和4年度】

◆退院時支援等に活用するためのアセスメントシート作成の検討

※川越教授の研修後作成した「脳梗塞アセスメントシート」について助言を頂く  
令和4年6月7日(火)・11月14日(月)ZOOMによる川越教授とのアセスメントシート検討会議  
「脳梗塞アセスメントシート」⇒「脳梗塞再発予防のためのチェックシート」と名称変更。  
※「脳梗塞再発予防のためのチェックシート」の使い方をイメージし、各専門職からの説明・アドバイスしてもらうなど、利用しやすい説明、内容を検討していく。

◆入退院調整ルール策定後の利用状況及び課題の把握と入退院調整ルールの更新を検討

※令和5年1月13日(金)多職種連携を考える会「入退院調整ルールの活用における現状と意見交換会」開催。  
・埼玉県医療整備課職員による入退院支援ルール策定についての経緯報告  
・医療機関の立場から、入退院調整ルール活用状況について報告  
・介護支援専門員の立場から、入退院調整ルール活用状況について報告  
・グループワークで現在の活用状況と今後の活用方法及び改善策等を意見交換

◆意見交換会終了後、事業所調査と入退院調整ルール利用状況アンケートを管内各機関へ送付。

<アンケート結果より現状と課題>

1. 入退院調整ルールの活用により、概ね連携はとれていることが分かる。
2. 疾病の再発予防・重度化防止のための、効果的な支援へつながら、退院時カンファレンスの更なる活用が必要。

【令和5年度】

◆入退院調整ルールの改訂(7月)。

◆「多職種連携を考える会」の実施

講師:うちだ福祉相談事務所 内田英一氏  
対象者:入退院時支援に携わる医療・介護関係者  
※令和5年11月17日(金)「入退院時におけるケアマネジャーと病院等職員との円滑かつ効果的な連携のために～退院時カンファレンス、サービス担当者会議のポイント～」

<研修会アンケート結果より>

連携を図るため、顔の見える関係づくりの重要性、医療と介護のそれぞれの立場や視点を認識できた。